

[070] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10197>

出版情報：語文研究. 70, 1990-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

西丸妙子著

私家集全釈叢書9

『檜垣嫗集全釈』

『檜垣嫗集』は、平安時代を通じて稀に見る、九州を舞台とする地方色豊かな歌集である。どの系統の本文によってもわずか三十首前後の作品であり、歌数が少ないだけに、一首一首の歌の吟味が重要となるが、本書では、穂久邇文庫蔵『檜垣嫗集』を底本として、極めて詳細な語釈、および人物・地名をはじめとする考証が、幅広い視野からなされている。

解説においては、従来の檜垣の人物像や、『檜垣嫗集』の成立論を踏まえながら、新見を提出している。『檜垣嫗集』は、従来、伝誦歌の集成と考えられることが主であったが、著者は、『檜垣嫗集』において想定され得るのは、「編者」というよりは「作者」と呼ぶべき存在であり、歌は、主として『檜垣嫗集』のために作られたものと見る。そして、「伝誦や先行文学作品で知られていた女性に擬して」「才女落魄物語を仕立てるという意図」で「男性によって創作された」「歌物語」的家集であることを指摘するとともに、様々な蓋然性から、『檜垣嫗集』の作者として、源重之の可能性を想定している。『後撰和歌集』『大和物語』の檜垣のイメージをもとに、清原元輔とその一族を歌集の中に取り込みながら、『檜垣嫗集』独自の檜垣像が形成されているという見方も、卓見である。

また、檜垣嫗伝説を近世のものまで収集し、「伝説についての資料（近世まで）」としてまとめてあるのは、近世文学研究者にとっても有益である。

更に索引では、「和歌五句索引」の他、懸詞にも配慮した歌と詞書の「語彙索引」を付載し、利用者の便を図っている。

（平成二年五月 風間書房 A5判 二〇九頁 四九四四頁）

中野三敏校注

新日本古典文学大系81

『田舎荘子・当世下手談義』

当世六さがし』

岩波書店の新日本古典文学大系の一冊として出された本書には、次に示すように、五編の談義本がおさめられている。

『田舎荘子』

『勞四狂』

『当世下手談義』

『当世六さがし』

『成仙玉一口玄談』

更に、『勞四狂』の作者である白墮落先生の『風俗文集』が付録として収録されている。

先年飯倉洋一氏によって『田舎荘子』が叢書江戸文庫『佚斎栲山集』に収められた以外は、翻字されたものはあったものの、掲載されたものがそれぞれ雑誌であったり叢書であったりと一覽に不便で

あったが、このようにまとまったかたちで正確な翻訳が提供された事は歓迎されよう。更に談義本に詳細な注が付されたのも初めての事であり、味読に便ならしむるものである。

収載の書目を見れば分かる通り、『艶道通鑑』とともに著者の言われる「広義の談義本」の嚆矢とされる『田舎狂子』に始まり、「狭義の談義本」の出発点でありその後の談義本を方向付けた『当世下手談義』をおさえ、その談義本の流れの一つの「穴さがし」ものの『当世穴さがし』に到るというように、本書は談義本史を概観する構成になっており、さらに談義本のなかでも特色のある『芳四狂』と『成仙玉一口玄談』が加えられている。そのことは、解説に「談義本略史」とうたっていることからうかがえよう。即ち、解説を参照しながら収録作品を読み進めば、おのずから談義本の盛衰を知る事ができるようになっていいる。

本書によって、専門の研究者はもちろん一般の読者にも、いままてあまり注目されなかった江戸中期の戯作が見直されることが期待される。

(平成二年五月 岩波書店 A5判 四一八頁 三三〇〇円)

奥村三雄著『方言国語史研究』

本書は、「文献国語史に対立する方法論的概念」として「方言国語史」を提唱する著者が、その理論から実践までを、一冊の本にまとめたものである。章立てを次に掲げる。

第一章 方言国語史

第二章 方言国語史の方法

第三章 方言分布相から史的考察へ—周囲論の分布を中心に
第四章 方言系譜論—方言国語史学の一環として

第五章 方言国語史と日付

第六章 方言国語史に見た南島方言(Ⅰ)

第七章 方言国語史に見た南島方言(Ⅱ)

第八章 方言国語史に見た日本語諸方言

第九章 方言国語史と文献国語史の連繫

序文・第一章・第二章において「方言国語史」の概念やその意義・方法が説明された後、第三章以下で詳しい考察が行われる。その長所・短所をふまえながらの考察は、近畿・九州・南島方言等を中心に語彙的現象・音韻的現象・文法的現象(形態論的現象)と多岐にわたっており、「方言国語史」的方法の持つ、大きな可能性が示唆される。その具体的調査結果・考察の一つにも価値があること、勿論であるが、特に、南島方言に見られるイ列・エ列・オ列の甲・乙類区別—いわゆる特殊仮名遣い—傾向の指摘(第六章)は、貴重なものといえよう。更に、第九章では、「方言国語史」的方法によって得られた推論を「文献国語史」的方法によって検討する等、「方言国語史」と「文献国語史」の成果とをつきあわせることにより、手堅い論が展開される。

なお、本書は論文集ではないが、論述の内容が「方言国語史」のあらゆる面にわたるとい性格上、既発表論文と関係する部分も多い。これら関係論文については、後書きにおいて、本書の章立てと対比する形で列挙されている。

(平成二年九月 東京堂出版 A5判 八四二頁 一五四五〇円)